

今年も残りわずか。年が明ければ、すぐに国家試験が待ち構えます。4年次生にとっては、今が追い込みの時期です。各学科・専攻の担当教員に試験に向けた取り組み紹介とともに、「ひと言エール」もいただきました。

学科専攻の取り組み

国試合格へ最後の追い込み

カルタ取り大会 久々に復活

医学検査学科

模擬試験や補習講義だけでなく、グループ学習や成績低迷者への面談、manaba を利用した生活習慣を整えるための朝小テスト等を行っております。また、特に今年度は医学検査学科全員で国家試験に臨めるよう、国試問題を取り入れたカルタ取り大会のイベントも数年ぶりに復活開催しました。

<ひと言エール>

いよいよ4年間の集大成の日まで残りわずかです。これまで、そしてこれからの勉強の積み重ねを信じて、決戦の日まで一緒に頑張りましょう！（上妻行則、山口類、原口美紗）

リハ学科 理学療法学専攻

「国家試験に用いているテキストの隅から隅まで勉強しましょう！」をキャッチフレーズに、今年度も国家試験対策に取り組んでおります。

<ひと言エール>

分からないことは、インターネットに頼るのではなく、すぐに教員や友人に聞くことで時間が短縮し、質問を受けた友人は知識を共有することで、記憶定着の助けになります。もしも気持ちが後ろ向きになったら、ぜひ「2024年度新4年生に送る先輩からの激励メッセージ」を読んで、気持ちを前に向けてください！（土井篤、申敏哲、中原和美、與座嘉康）

グループで学習目標を設定

午前中グループワークで知識の確認をし、午後からは個別で勉強をしています。グループリーダーが1週間に1回集まり、各グループの進捗状況を確認しています。次の模試で何点を目指すか、学習目標を立てながら進めています。

<ひと言エール>

国試は頑張った分だけ、結果がついてきます。「努力は裏切らない」という言葉は国試のためにあるかもしれません。みんなで頑張りましょうね！（仙波梨沙、小手川耕平）

学生委員中心に補習企画

看護学科

今年度から、学年全体で国家試験に取り組むスタート時期を早めました。学生委員を中心に模擬試験や補習講義の企画・実施を行い、特に必修対策を万全にしながら、「全員合格！」を合言葉に活動できています。

<ひと言エール>

前途有望たるみなさんには、若さと行動力があります。＜夢に描いた未来＞がもうすぐ！ 自信をもって飛びたちましょう！（大澤早苗）

過去問中心とした実践講義

国家試験対策は、前期は「基礎知識ならびに学習習慣の定着」を目標に、言語聴覚士テキストと国家試験マスターノートを使用し講義と各SGでのグループ学習、月1回の模擬試験を進めてきました。後期は、国家試験の過去問を中心とした実践講義と前期同様に月1回の模擬試験を実施しています。

<ひと言エール>

ST専攻の場合は、国家試験に向けての勉強を1年間かけて実施しています。「継続力・計画力」が重要となります。SG担当教員や国家試験担当教員とコミュニケーションを取りながら、ひとつひとつ着実に目標をクリアしていけるように一緒に頑張りましょう。（池寄寛人、松尾朗）

リハ学科 言語聴覚学専攻

国家試験日程表

資格	試験日	合格発表
助産師	2月13日	3月24日
保健師	2月14日	3月24日
言語聴覚士	2月15日	3月26日
看護師	2月16日	3月24日
臨床検査技師	2月19日	3月21日
理学療法士	2月24日	3月21日
作業療法士	2月24日	3月21日

テキストの隅から隅まで……

リハ学科 生活機能療法学専攻

竹屋学長 4 期目続投

理事会決定「選ばれる大学目指す」

学校法人銀杏学園理事会が11月27日（水）開かれ、竹屋元裕学長の再任が決定しました。

竹屋学長は熊本大学医学部長、同大副学長を経て2019（平成31）年4月から本学学長を務めており現在3期目。4期目の任期は来年4月1日から2027（令和9）年3月31日までです。

4期目の続投が決まり、竹屋学長は「レベルの高い医療人の育成を通して、10年後も20年後も選ばれる大学を目指します」とコメントしました。



竹屋 元裕学長

竹屋学長コメント

これまで学長3期6年を務め、教育体制の強化と大学のブランド力の向上に努めてきました。令和4年度にはPT専攻へのスポーツリハビリテーションコースの設置および健康・スポーツ教育研究センターの立ち上げ、令和6年度には認定看護師教育課程における脳卒中看護分野と認知症看護分野の同時開講を実現しました。学長4期目となる令和7年度には九州初となる保健師養成のための公衆衛生看護学専攻科を開設予定で、レベルの高い医療人の育成を通して、10年後も20年後も選ばれる大学を目指します。教職員の皆さんと一丸となって目標を実現したいと思います。



私の部屋で
ランチを

ウェアラブルな高性能マイク開発

騒音環境下でも使用可能 聴診器も



前田 ひとみ特任教授
（保健科学研究科）
小野 綾太さん
（熊本大学大学院2年）

図書館主催の「私の部屋でランチを」第70回と「サイエンスカフェ」第31回（合同開催）が11月29日（金）、キャンパステラスであり、研究チーム「エクテルソン」に所属している前田ひとみ特任教授と、熊本大学大学院自然科学教育部博士前期課程2年の小野綾太さんが「私のことばをあなたに届けたい ―フレキシブルでウェアラブルな高性能マイクの開発―」と題して話しました。

冒頭、前田特任教授が「マスク着用によるコミュニケーション障害を解消したいという思いからマイクの開発を始め、エクテルソンというチームに発展した」と研究チーム結成の背景を説明。その後小野さんが、現在エクテルソンで

開発中のウェアラブルマイクの原理と成果について紹介しました。

エクテルソンで開発中のマイクは、供給電源を必要とせず、騒音環境下でも使用可能で、柔軟性に富んでいるため壊れにくいという特長があります。このマイクの特長を応用し、エクテルソンでは騒音環境下でも使用可能な聴診器を開発するなど、多岐に渡る挑戦を行っています。

会は、前田特任教授の「ともに活動する仲間大歓迎です。この取り組みに興味のある方は、ぜひ声を掛けてほしい」と有志を募る言葉で締めくくられました。

（NL編集部）

エクテルソンで開発中のウェアラブルマイクの原理と成果について話す小野さん。右は前田特任教授



言語聴覚学専攻で卒業研究報告会

活発な意見交換 後輩にも刺激

リハビリテーション学科言語聴覚学専攻4年次生の卒業研究報告会が2日（月）、3218実習室で開催されました。

報告された内容は、小児関連、成人の言語や嚥下関連、言語聴覚士の認知度、保護者や学校教員に対するアンケート調査など様々な領域にわたっていました。会場では活発な意見交換がなされ、非常に熱気をおびた報告会となりました。

3年生は実習中で参加できませんでしたが2年生が参加し、「先輩方はすごい。自分たちも頑張らないと」と感想を述べた学生もあり、かなり刺激を受けたようでした。4年次生の皆さん、卒論に費やした9カ月間、本当にお疲れさまでした。

（言語聴覚学専攻 大塚裕一）



後輩の目の前で活発な意見交換が行われた言語聴覚学専攻の卒業研究報告会

ジョイスとアイルランドに恋をして

20世紀を代表するアイルランド作家ジェームズ・ジョイス（James Joyce 1882-1941）を研究しています。調査のため9月に1週間ほどアイルランドの首都ダブリンへ行きました。最近ではデジタル・アーカイブなどを利用すれば日本にしながら情報を収集することが可能ですが、デジタル化されていない雑誌や原稿などを閲覧するためには現地での調査が必要になります。アイルランド国立図書館は様々な資料を豊富に保存していて、サインさえすれば基本的にはすべての資料をスマホ等で撮影できます。

ジョイスは22歳の時、後に妻となるノラ・バーナクルを連れてアイルランドを去りました。彼はその後3度しか故郷ダブリンの地を踏むことはなかったにもかかわらず、あるいはだからこそ、ダブリンとそこに住まう人々を描き続けました。ダブリンの街を歩いているとそんな彼の作品の各場面が眼前に現れます。国立図書館もその一つですが、『ユリシーズ』（1922）の出だしの舞台であるマーテロー塔、主人公が食事をするパブ、リフィー川のカモメ、思い出のホースの丘などジョイスが再現した20世紀初頭の風景が形を変えながら今でも残されています。

ある日オConnell通りにあるジョイスの銅像に人だかりができていました。近づいてみると、銅像の横に新しく丸いスクリーン画面が設置されていたのです。これは、<ポータル>（The Portal 「入口、玄関」）という、米ニューヨークとアイルランドのダブリンをライブ動画で結ぶ彫刻作品だそうです。迷惑

行為も多く一時撤去されたりもしたのですが、若者たちはジョイスの銅像には目もくれず、楽しそうに画面の向こう側に手を振っていました。そんな世の趨勢にジョイスはアイロニカルな視線を向けているかのようでした。

“ Mistakes are the portals of discovery.” by James Joyce.

「誤りは発見の入口」として過ちや失敗を受け止めることができれば、世界や未来への扉を開くことができる、そのように感じます。物事をどう捉えるのかを、私が恋したジョイスと彼の物語の世界観を柔軟に守り続けるアイルランドは常に問いかけてくれます。



ジョイス像とポータル。若者たちの関心は、米ニューヨークとつながった丸い画面のポータルに。

共通教育センター

田中 恵理 准教授

健康・スポーツ
教育研究センター

レポート

ハンドボール女子のBピンディーズ

勝利に向け8項目の能力測定

本学と包括連携協定を締結しているハンドボールチーム、熊本ビューストピンディーズの選手を対象に、30m走、Handball Agility、メディシンボールスローなど全8項目の測定を11月24日（日）、山鹿市のオムロン鹿陽センターで実施しました。

健康・スポーツ教育研究センター教員の指導の下、選手10人に対して、本学スポーツリハビリテーションコースの学生10人、大学院リハビリテーション領域の学生2人と、朝日野総合病院の理学療法士2人が測定を行いました。

担当した本田啓太講師は「トップアスリートの体力や体組成の経時的な変化をリアルに観察できることはスポーツ科学分野での活躍を目指す学生にとっても非常に意義深い。今後も選手の皆さんを全力でサポートしていきたい」と語りました。

今回のフィールドテストも、本学学生たちにとって非常に貴重な学びの場となりました。これからも熊本ビューストピンディーズとの連携がより強固になり、選手の障害予防そして勝利へとつながるよう、努めたいと考えております。

ピンディーズは12月18日（水）から福井県で開催される日本ハンドボール選手権に出場します。（健康・スポーツ教育研究センター 中村祐貴）



選手（左4人）に方向転換走の説明をする学生

週間行事予定（12月10日～12月16日）

12/10（火）	JR西里駅開業70周年セレモニー
12/12（木）	第4回学術講演会
12/13（金）	防災訓練
12/13（金）	岱志高校 大学訪問
12/14（土）	話してみよう韓国語